



安倍昭恵会長

令和八年 年頭のご挨拶  
新年おめでとうございます。会員の皆様並びに戦没者慰霊諸団体の皆様にはご家族ともどもよいお正月をお迎えることとお慶び申し上げます。  
また、旧年中は本協議会の活動に多大のご協力ご支援をいただき心からお礼申し上げます。  
昨年を振り返りますと大東亜戦争が終結して80年の節目を迎えた年でした。日本武道館で執り行われた日本戦没者追悼式をはじめ各地の追悼式で故郷や

愛する家族を思いつつ散華された戦没者各位を悼むとともに平和への誓いを新たにしたい年でもあったように思います。  
当協議会においても会員各団体とともに斎行する年間最大の行事である「令和7年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を7月5日に関係各団体代表を含み108名の参列者を得て靖國神社において行うことができました。  
また、参列はかなわないものの在宅での参拝を希望された100名の方を含み208名の名簿を神前に奉奠しました。暖かいお心をお寄せいただいた会員及び慰霊諸団体の皆様に厚く御礼申し上げます。  
戦没者遺骨収容事業においては「戦没者遺骨収集推進法」に基づき設立された「一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会」(以下、「推進協会」といわせていただきます)の活動が政治

・外交情勢が不安定な国を除きほぼ計画通り実施されました。  
硫黄島における遺骨収容事業は令和7年に4回計画されたところ硫黄島の自然環境に伴う状況の悪化から2回しか行われませんでした。当協議会においても推進協会の社員団体として会員各団体から推薦をいただいた方々がそれぞれの収容事業に参加されました。  
異郷の地でご帰還を待ちわびておられる112万余柱に及ぶ方々を一日も早くお迎えするため事業を効率的に進めることが肝要かと思つ次第です。  
昨今の世界情勢を見れば欧州ではロシアのウクライナ侵攻、中東ではガザ地区でハマスとイスラエルの戦闘が市民を巻き込んで続いています。  
それぞれの国家において、正規軍人とともに昨日まで一般市民であった方が招集され国家安寧のために兵士として戦闘に赴くこととなり、またご主人



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

## 第 6 6 号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋 1-5-7

東専堂ビル2階

電話 : 03 (6380) 8943

FAX 03 (6380) 8952

<https://ireikyou.com>

振替口座 00140-6-334930

編集人 國澤輝生

発行人 國澤輝生

印刷所 (株)SG初スホールディングス

## 目 次

安倍昭恵会長 年頭のご挨拶	1
戦後の節目にあたり、過去・現在・未来を繋ぐ「平和の社」の役割を考察する(前段)	3
あの戦争を振り返り戦没者の霊を慰める(第十七回)	7
硫黄島戦没者遺骨収集に参加して	13
事務局からの報告等	15



靖國大絵馬は、愛知県名古屋市中伊勢絵馬協賛会安田識人氏から御祭神奉慰のため昭和五三年から奉納いただいているもので、横二・七六m、高さ二・一九mのジャンボ絵馬として新春の靖國の名物となっている。

やご子息などを戦地に送り出し、自らも戦禍に見舞われながら無事の帰還を願って日々過ごしておられる留守家族のお気持ちを考えて、大東亜戦争という未曾有の国難に立ち向かわれた先達各位のお心と重なり胸が痛みます。

我が国周辺においても弾道ミサイルの発射を繰り返す北朝鮮や東シナ海・南シナ海・日本近海において周辺諸国に圧力を加え続ける中国等の不安定要因が存在しております。

新しい年を迎え、過去の歴史を踏まえ、先人の御霊に応え平和で明るい未来を守れますよう倍旧の努力が必要なた時代であるとの認識を持ち、協議会活動に臨んで参ります。

令和8年においても会員各団体とともに斎行する「令和8年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を7月4日(土)に靖国神社に於いて斎行しますので会員各位をはじめ多くの皆様のご参列を仰ぎ哀悼の誠を捧げたいと存じます。

もう一つの柱である戦没者慰霊思想の普及ですが、大東亜戦争を知らない世代を焦点に例年通り広報誌「慰霊」を年3回発行するとともに、ホームページを適宜更新し大東亜戦争に至る歴史的経緯、その苦闘の歴史等を伝え併せて戦没者崇敬に係る意識の作興を図って参ります。

また、各戦地から未だご帰還を果たされていない遺骨収容事業にも会員団体とともに尽力して参る所存です。

昨今、慰霊諸団体共通の課題としてこれまで活動を支えていただいていた会員各位が高齢になられ会員の減少が続く運営基盤が弱体化して参りました。会員団体と手を携えて本課題に取り組んで参りたいと考えております。会員の皆様にも忌憚のないご意見、ご要望をお聞かせ願いたく存じます。

旧年を回顧し、新年への思いを記しましたが、私自身これらを思い描きながら心新たに戦没者の御霊をお慰めして参りたいと存じます。

今年も私どもの活動にご支援ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。挨拶とさせていただきます。

令和八年元旦

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 安倍 昭恵

## 謹賀新年

公益財団法人

陸修偕行社

会長

森 勉

理事長

火箱 芳文

副理事長

岩田 清文

専務理事

内田 益次郎

事務局長

本庄 俊弘

公益財団法人

水交會

会長

杉本 正彦

副会長

佐賀 幾雄

理事長

河野 克俊

専務理事

村川 豊

事務局長

徳丸 伸一

航空自衛隊退職者団体つばさ会

会長

杉山 良行

副会長

丸茂 吉成

副会長

片山 隆仁

副会長

藤田 信之

副会長

谷井 修平

専務理事

福永 充史

事務局長

荒木 文博

## 謹賀新年

公益社団法人

隊友会

会長

折木 良一

理事長

岩崎 茂

常務理事

徳地 秀士

常務理事

岩田 清文

事務局長

山村 浩

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長

藤田 幸生

理事長

岩崎 茂

副理事長

岡部 俊哉

専務理事 兼

事務局長

事務局長

石井 光政

公益財団法人

千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

会長

鈴木 俊一

副会長

羽毛田 信吾

副会長

小池 百合子

理事長

千本 倅生

常務理事

保松 秀次郎

常務理事

中村 勤

常務理事

杉本 順則

常務理事

槻木 新二

常務理事

住吉 一俊

# 戦後の節目にあたり、過去・現在・未来を繋ぐ「平和の社」の役割を考察する(1)

靖國神社 宮司 大塚 海夫



けに止まらず、日本は実に世界に誇る「比類なき平和国家」なのである。そして、このように平和に恵まれたからこそ、穏やかで寛容、包摂的な神道が生まれたとも言えよう。明治維新を経た新生日本が国家としての最初の招魂祭を行う際に、江戸時代末期から国学が流行となる環境下、日本古来の神々を祀る神道の形式に則ったことは時流の必然であったと言える。

靖國神社の原点は、この新生国家による最初の招魂祭にある。以後、今日に至るまで、靖國神社は我が国の戦歿者奉慰顕彰の中心的存在となってきた。国のために命を捧げた二百四十六万六千余柱の御祭神が鎮まる靖國神社は、英霊の奉慰顕彰を通じて過去と現在を繋ぐ大切な使命を果たしてきたが、未来の平和に続くベクトルを描くという点でも、等しく重要な役割を担っている。

**はじめに**  
昨年のパリ五輪で、日本の若きメダリストが、日本に戻ったら特攻資料館を訪ねて、生きていること、そして好きなことができることが当たり前ではないことを感じたい旨を語っていた。平和な生活が送れることは素晴らしいことだ。だが、世界的に見ると、平和の裡に日々を送れることは決して当たり前のことではない。

八十年間、およそ三世代にわたり日本で平和が続いていることは世界的に見て稀有な事例である。この八十年だ

## 平和は努力して獲得するもの

本年は、大東亜戦争終戦八十年目に当たる年として注目を浴びているが、同時に、日露戦争終戦百二十年、日清戦争終戦百三十年と、近代日本が戦った大きな戦争の節目の年に当たる。

八十年の長きにわたり平和を維持することができた国家は少ない。現在の国連加盟百九十三か国中、千九百四十五年以来、内外戦争に関与していない国家、国連平和活動において戦闘を経験していない国家は恐らく日本、スイス、バチカン、アイスランド、サンマリノ、アンドラ、モナコ、コスタリカ、リヒテンシュタインの九か国ぐらいなものである。そもそも八十年前に存在した国は約七十か国しかない。戦後の占領期間を含むものの、日本のような「大国」が、戦争に関与せずに八十年間を平和の裡に過ごすことができたのは、世界的に稀有なことなのである。世界最新の独立国家である南スーダン、は、二十一年の独立以来、紛争のなかった年はない。オーストラリアは平和で治安も良く日本人に人気の渡航先であるが、朝鮮、ベトナム、アフガニスタン、イラク、シリア、リビアへ軍を派遣し戦闘に参加し、多くの戦死者を出している。

## 謹賀新年

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

会長

安倍

昭恵

理事長

山下

輝男

副理事長

石井

光政

専務理事

伊藤

隆

事務局長

國澤

輝生

軍学堂

医療法人社団 伍光会

サスラボ株式会社

株式会社 青林堂

特定非営利法人 孫子経営塾

特定非営利活動法人

日本サイパンFRIENDSHIP協会

株式会社 リアリ



私が大使として三年間を過ごしたジブチ共和国は、四国の一・三倍の面積に人口百万、天然資源もなく食糧自給もできず、驚異的な失業率の高さ、そして、何よりも国内外に騒乱、騒擾の種を抱える国々に囲まれる中、唯一、域内で平和と安定を享受する希有な国だ。その陰では、外交力を駆使して米中という対立する二大国の基地を誘致し、隣接する「万年紛争国」ソマリアへ十年以上にわたり、常時、国軍の四分の一の兵力を平和維持活動のために派出し、その結果、六十名を越す死者も出ず、文字通り血の滲む努力をしている。

私は四十年以上、安全保障を生業とし、平和の創造、維持のための努力の一端を担ってきたが、平和は時間とお金、そして時には命の犠牲を伴う多大な努力の上に創出するものであり、タダでは獲得できないものというのが国際常識であることを思い知らされた。

## 「比類なき平和国家」に生まれた「自然道」

日本の国柄を語る際、今上陛下が百二十六代の天皇という事実だけで、世界中の誰もが度肝を抜かれる。その脈々と続く日本の歴史の中で、長く平和が続いたことを知ると更に驚く。二百六

十年の平和を享受した江戸時代、「文明の地」欧州では戦争のない年はほぼ無かった。更に遡ると、源平合戦が始まるまでの奈良・平安時代には、蝦夷等の地方での戦いや、いくつかの紛争はあったものの、基本的には数百年間の平和が保たれていた。ちなみに、この時代から現在まで継続している国家は、日本とサンマリノ共和国を除いて世界に存在しない。

最近の考古学的調査結果によると、縄文時代には、数千年単位で平和が続いていたとのことである。青森県の三内丸山遺跡には、今から五千九百年前から千七百年間の長きにわたり平和な文明があつたそう。集落に防御壁がなく、武器が発掘されず、武器で殺害された遺体が見られないのだ。山からは木の実、山菜、果物、「ジビエ」を、海からは魚介類を採取して食べ、新潟や神津島との海上交易もあつたらしい。

平和な生活を営むことができたのは、四季のある穏やかな自然環境に恵まれ、他人から食べ物を篡奪する必要もなく、また、大陸から適度な距離の島国だったため、騎馬民族の蹂躪も受けぬ一方、有益なものは導入することができたという地理的環境によるものなのだろう。

千七百年という年月は、古墳時代から現代に至る期間に相当する。その何倍もの期間、何世代に及ぶか数えきれないほどの長きにわたり平和が続いたとすると、日本人の身体に、DNAのレベルで平和が染みついていたとしても不思議ではない。一般的に日本人は、他人との関係において対立を極力回避しようとし、対立したとしても、圧倒的な勝利よりもウインウインの関係、より踏み込んでいえば共存共栄を追求するのを習わしとしている。やや飛躍に聞こえるかもしれないが、学校や会社での「討議、討論」が、世界の多くの国に比較して低調であり、反対意見を開陳することが極力控えられる傾向にあるのも、対立を忌避する性向ゆえではないだろうか。すなわち、日本人は、無意識のうちに、DNAレベルで平穏、平安、平和という概念を基盤として行動しているのだと思う。

四季に恵まれた豊かな自然を背景とし、千年単位の長期にわたる平和が基調であつた「比類なき平和国家」が育んだ穏やかで争わない民族性が、個人レベルでの思いやり、共同体レベルでの共存共栄、常にウインウインの関係性を前提とする道徳観を育むとともに、自然を畏敬し、祖先を崇拝する、共同

## 謹賀新年

- 海原会
- 英霊にこたえる会
- エラブ力東京都人会
- 岡山県郷友会
- 鹿児島県郷友会
- 神奈川県郷友会
- 駆逐艦菊月会
- 熊本偕行会
- 群馬陸修偕行会
- 甲飛喇叭隊
- 埼玉偕行会
- 佐賀県偕行会
- JYMA日本青年遺骨収集団
- 全国ソロモン会
- 全国メレヨン会
- 全ビルマ会
- 太平洋戦争戦没者慰霊協会
- 筑後地区偕行会
- 東京郷友連盟
- 東部ニューギニア戦友・遺族会
- ネービー21
- ハワイ明治会
- 福岡県偕行会
- 宮崎県陸修偕行会
- 山口県偕行会

体の宗教としての「**惟神の道**」、すなわち、後世の神道を生み出したのだと感じる。本年四月に逝去された田中英道東北大学名誉教授が提唱したように、日本人の精神性の原点はまさにこの「**自然道**」にあるのだ。そして、更に歴史を下ると、聖徳太子がそれを「**十七条憲法**」という形で、我が国の国是とも言える「**和**」という概念として結実させることになっていったのだろう。

### 神道は「宗教」なのか

江戸時代の泰平を享受していた日本にも帝国主義の荒波が迫る。千八百四十年の阿片戦争で、大清帝国が西洋の餌食になるのを目の当たりにした江戸幕府のリーダー達が、二百六十年間の平和と鎖国体制に浸りきっていたが故に、どうすればよいか考えあぐねたであろうことは想像に難くない。いたずらに時間が過ぎる中でペリーが来航する。清国の二の舞にならず、欧米列強の植民地化を回避するためにはどうすべきか、日本国内の意見が分かれ、政治闘争に移行する形で戊辰戦争が勃発する。幕藩体制は終焉し、新生日本が誕生する。独立維持という国家目的達成のため、開国して西洋の「文明」を採り入れ、富国強兵の方針が決定される。西洋の思想・文化が大量に流入す

るに当たり、主としてキリスト教を対象とする「**レリジオン**」の概念も導入され、その訳語として「**宗教**」が定着していく。この経緯を見ると、日本人にとつて「**宗教**」とは、歴史的・伝統的に日本人に馴染みの深い神道や仏教のような信仰とは異なる、一神教的思想を指す概念であると言つても過言ではなからう。

「あなたの宗教は何か」と訊かれると、今日、八割の日本人が「**無宗教**」と答えると言われる。しかし、圧倒的多数の日本人が初詣やお盆の行事を行い、季節のお祭りに参加し、時には「日の出」に手を合わせる。これは十分に「**宗教的**」行為である。食前に「いただきます」と感謝を述べることも然りである。このような日本人を「**無宗教**」と呼ぶのは適当と言えない。「**宗教**」という旗印を掲げずとも、極く自然に「**宗教的**」行為が身についているという点で、むしろ世界で最も「**宗教的**」な民族と言えるのではないだろうか。

さて、当時の日本人にとつて、国と言えば「**藩**」を意味した。しかし、欧米列強の植民地にならず、独立を維持していくために「**ネイション**」としての国家建設が急がれ、政府は祭政一致

による国家統治を目指した。そこには、欧米の宗教、特にキリスト教に対抗するためにも、国教を整備することが望ましいという思いもあつたに相違ない。

当初、遙か昔の律令国家に範を取ろうとした政府は、太政官、軍務官に合せて、神祇官制度を設置した。ところが神祇官制度はあつという間に解体されてしまう。六世紀の仏教伝来以来、神道は仏教と見事に習合し、明治政府が意図的に神仏分離するまで、千三百年以上の長きにわたり共存していた。共同体の宗教たる神道と、個人の宗教たる仏教は、対立する関係ではなく、むしろ相互に補充し合うことが可能だったのだろう。江戸時代中期以降に隆盛となった国字が、幕末には全国に広まったという世相も踏まえ、明治政府は、西洋の「**宗教**」に対抗するためにも、神仏判然令を出して神道を分離し国教にしようとしたが、無理だったということだ。そもそも、神道には教義も経典もなく、したがって、国家の「**宗教**」とは成り得なかったのだろう。

そのような神道を、政府は国家・国民の倫理的・道徳的規範たる「**祭祀**」と位置付ける。伝統宗教であれ新興宗教であれ、宗教には教義が伴い、その結果、宗教家は説教をすることになる。

ところが、教義がなく、ひたすら祭祀の厳修に務める神職は説教するということがない。神職は、「仲執持ち（なかつりもち）」と呼ばれ、神様と参拝者の間を取持つことが役目になる。キリスト教や仏教、あるいはイスラム教やユダヤ教のように、「**真理**」を説くことはしない。その点からも、「**宗教**」という分類にはそぐわないという考えもある。

大東亜戦争後、占領軍は日本文化に対する浅薄な理解に基づき、いわゆる神道指令を発し、神社に対して、宗教法人になるか消滅するかとの二者択一を強要した。神社界は生き残りをかけて宗教法人となる道を選んだが、それが日本人一般の考える「**宗教**」の概念に基づくものだったのか。この問題は更なる考察が必要となるだろう。

### 靖國神社御創建と英霊祭祀

さて、新国家体制に向けての産みの苦しみであった戊辰戦争で戦歿した官軍三千五百余柱の英霊を祀るため、明治天皇の思召しにより東京の九段坂上に仮本殿・拝殿が造営され鎮座祭が斎行された。この招魂社が明治十二年に靖國神社と改称されて今日に至っている。「國を靖んずる」とは、国に平和をもたらすことを意味する。靖國神社

はまさに「平和の社」なのである。東京の靖國神社における国家としての慰霊・顕彰は、天皇陛下を中心とした日本という新しい国民国家体制建設に向けた象徴的行為だったと言える。明治維新に至る過程での招魂の儀式は、同志によつて、あるいは長州のように藩により行われていた。他方で、新しい国家体制の下で、国家として戦死者の慰霊・顕彰を行ったことは、世界の先駆けでもあり画期的だった。

領政策の一環として、「日本版」政教分離の概念が強調され、政府が直接、靖國神社に合祀の指示を出せなくなつたことから、靖國神社が英霊の合祀を続けることは不可能と思われた。御祭神を決めるのは政府の役割であり、戦死者のデータはすべて政府が保有していたのである。しかし、国民、就中、御遺族の悲願として、一刻も早い合祀が求められており、政府は可能な限り靖國神社に最大限の協力をするという方針を明確にした。

明治十年の西南戦争を以て、国内は安定化する。以後、神社に祀られる御祭神は、日清戦争から大東亜戦争にかけて、外国との戦争に際して、国のために尊い命を捧げた方々となり、今日、合わせて二百四十六万六千余柱の英霊が祀られている。戦死者が生ずる都度、陸海軍部隊の指揮官が陸海軍省に上申し、各大臣から天皇陛下に上奏して、御裁可を得た上で、名簿が神社に送られ、靖國神社では、その名簿に基づき戦死者の「みたま」を招魂し合祀祭を行ってきた。

大東亜戦争における戦死者は全御祭神の九割以上を数えるが、その大多数の合祀が行われぬまま終戦を迎え、混乱の裡に占領下での日々が流れた。占

既に陸海軍省は消滅していたものの、復員省、その後は厚生省が戦死者遺族に関する事務を引き継ぎ、その業務の一環として靖國神社にも祭神名簿が送付されることとなり、昭和三十四年までに、ほぼ合祀が概成する運びとなつた。国家の祭祀を行ってきた神社が、

占領政策の結果、突然に宗教法人とされ、政府との関係を断たれた。しかし、英霊の合祀に関して、政府はどなたを御祭神としてお祀りするかという点で、また、靖國神社はその方を御祭神として合祀するという点で、それぞれが戦前と変わりなくその責任を果たすことができたのである。

靖國神社では毎日、御祭神に朝夕の

お食事を差し上げる朝御饌祭、夕御饌祭、そしてその日付に散華された英霊をお祀りする永代神楽祭が行われる。毎月、一日、十一日、二十一日の月次祭や、御創立記念日祭などの中祭と呼ばれる規模のお祭り、そして全神職が参籠して御奉仕する春秋の例大祭と祈年祭、新嘗祭という大祭など、年間に千回を優に超えるお祭りを齎行し上げている。加えて、関係団体などによる慰霊祭、遺族崇敬者の参拝など、神職はひたすら神明奉仕に明け暮れる。

その目的は英霊の奉慰顕彰であり、国のために尊い命を捧げられた御祭神への感謝と、平和への祈りを捧げるのである。

自衛官は任官に際して「服務の宣誓」を行う。そこには、「事に臨んでは危険を顧みず身をもって責務の完遂に務め」と、「死んでも責任を果たします」という国との約束が含まれる。私もそのような人生を四十年間歩んだが、もし自分の身に何かあった場合に、最も気になるのは、やはり後世の人々が自分の行為を覚えていてくれるだろうかということだ。

近代日本において、戦死者の神霊を国家として靖國神社に祀り、その名譽を永遠に顕彰してくれるという安心感と誇りを約束することが靖國神社への

合祀であつたのだ。戦争は国家の営みであり、その意味で、国家による英霊の奉慰顕彰は、戦地に赴く兵士の覚悟に国家が応える精神的支柱であり、当然の義務なのである。現在の靖國神社は、法的には政府の管理を離れてはいるが、国のために尊い命を捧げられた英霊に対する責務は、今後とも果たし続けていく。英霊の皆様は、生前、ご家族に、自分に会いたければ靖國神社に来るようお願いし、また、戦友同士、次は靖國神社で会おうと言って戦った。靖國神社こそが英霊の奉慰顕彰の場であり、それは靖國神社にしか果たせない役割、他の施設では代替が利かないのである。

(続く)

編集者注

本寄稿文は、「英霊にこたえる会 たり」(第69号 終戦八十年記念号)に掲載された文章を大塚宮司が一部加筆修正されたものです。

なお、ご本人の了解のもと、本誌の都合により2回に分けた連載とさせていただきます。

『あの戦争を振り返り戦没者の  
霊を慰める』 第十七回

東京裁判研究者

元くらしき作陽大学教授

松元 直歳

## 大東亜・太平洋戦争への前奏曲(Ⅱ)

## 戦間期の日米中関係から開戦へ

(その12) 満州事変から大東亜・太平

洋戦へ…盧溝橋事件から日支間全面戦

争へー1937(昭和12)年頃に日本

が大陸で直面した困難(Ⅴ) 日本軍の

南京攻略のいわゆる南京事件(その四)

上海から南京へ

1937(昭和12)年7月7日の盧溝橋事件勃発を嚆矢として、同年8月13日に始まった日支間の第2次上海事変は、上海地区における日支間の大激戦を招来した。第2次上海事変から南京攻略に至る戦いを「日本軍の連戦連勝」と描する向きもあるが、事この上海での戦いに関する限り、日本軍の損傷は莫大なものであった。例えば、『戦史叢書』から引用された、偕行社『南京戦史』307頁によれば、「上海戦において、8月23日上陸以降、謬着した戦線が動き始めた11月8日まで

の我が陸軍の戦死傷者累計は、40、372名の多きにのぼった」のであった。中支那方面軍を構成した上海派遣軍中の第9師団(師団長吉住良輔中将)に限ってみても、同じ頁に記載された我が軍の損害に関する「第四表 第9師団の上海―南京作戦間戦死傷者数」に従えば、南京攻略戦の戦死者は460名、上海から南京への追撃戦の戦死者が683名であるのに対して、上海戦の戦死者は3、833の多くを数えたのであった。

しかし日支両軍による流石の大激戦も、日本側上海派遣軍の急派、兵力増強、海軍航空の南京空襲と陸軍航空の上海進出に加えて、柳川平助中将司令官に率いられた第10軍の杭州湾白茆口上陸によって、形勢は一変した。中国軍は総崩れとなり、一路、首都南京方面に向かつて退却を開始したのである。ただここで一点、付け加えておかねばならない。即ち、中国軍総崩れのあとの追撃戦、また南京防衛陣地の攻撃と南京城の攻略の戦いといえども、容易な戦いではなかった事である。その理由は、上海、南京そしてさらに続く後の蒋介石中華民国との泥沼の戦いのそもその発端は、中国側のイニシアティブによって1937(昭和

12)年7月7日に始まった盧溝橋事件にあつた事を考えればよい。中国軍の戦意は、特にその初期に於て充分に高かつたのである。両軍の戦いの様相は、熾烈、苛烈なものであつたのである。

何れにしても戦火は、先ずは上海から南京へと拡大する。日本軍は南京への追撃戦に入る。両都市間の距離は、現在の高速度鉄道によつても約300キロであるが、追撃戦で歩いた距離は、これを遙かに上回るであろう。

本第17回稿(『慰霊』第66号)では、「いわゆる南京事件」について、「上海から南京への戦域拡大―南京攻略の決定」、「上海から南京へ―困難を極めた補給問題」を扱うこととする。

## 上海から南京へ―杭州湾への敵前上陸

「上海から南京への追撃戦」の第一歩若くは前提となつたのは、「日本軍第10軍と上海派遣軍第16師団の杭州湾・白茆口」への敵前上陸であつた。

これについて、偕行社『南京戦史』の言葉を借りて述べてみよう。

そもそも南京戦の事前段階、上海戦への兵力投入についても、9月下旬ころ、軍中央において、参謀本部第一部長(作戦)の石原莞爾が、「上海に対する兵力増強を『焼け石に水だ』とし

て同意しなかつた」結果、石原は、9月27日に更迭された。「代わつて下村定少将が作戦部長に就任して以来、主戦力を北支から上海方面に移すための研究が熱心かつ精力的に行われた」。

そして、第10軍と上海派遣軍の杭州湾・白茆口への上陸が実行される。即ち以下の通り。

10月20日には第10軍の戦闘序列(軍司令官・柳川平助中将、第6、第18、第114師団、国崎支隊Ⅱ歩兵第41連隊基幹)を下令し、『船舶資材の不足など作戦準備不十分には目をつぶつて』(下村作戦部長の回想)、大部隊の上陸は困難であるという従来からの兵要地誌(軍事利用目的の地形、水路、季候等の総合地理書)の定説を無視し杭州湾に敵前上陸を断行、中国軍の背後を衝かしめた。

また北支から第16師団を抽出して上海派遣軍の隷下に編入し、揚子江やや上流の白茆口に上陸して第10軍の作戦に策応せしめ、一挙に戦局を打開しようとしたのである。

166隻の輸送船に分乗した第10軍は11月5日、ほとんど敵の抵抗を受けることなく、朝霧たちこめる遠浅の金山衛付近の奇襲上陸に成功、泥濘の悪路を冒し、第6師団を松江

から北方の崑山方向に深く突進せしめて上海の中国軍の背後を衝くとともに、軍主力は（南京寄りの）西方の金山、嘉善、嘉興付近に進出した。

杭州湾上陸直後の第10軍第6師団（師団長谷壽夫中将）の状況はどのようなものであったか。同師団の通信小隊長・鵜飼敏定氏の回想を引用する。

「ほとんど敵の抵抗を受けることなく」とはいうものの、現実には、師団長以下将校と雖も、兵と同様の方法で、悪路の中を進軍せねばならなかった。

## 第6師団通信小隊長・鵜飼敏定氏の回想

揚陸した野砲を中心とする重車両部隊は揚陸地点に残置し、師団は小銃、軽、重機と軽砲（山砲と歩兵砲）をすべて兵の肩に担い携帯口糧とてきるだけ多くの弾薬のみを身につけて前進した。師団長以下将校は、狙撃を避けるためすべて兵服に着替え、地下足袋、巻脚絆で泥濘の畦道を一列縦隊で進撃する。師団長も馬なし、水田は深田で、中央の一輪車が通れるよう敷石をした幅1メートルくらいの畦道があるが、網の目のように

走るクリークの橋はすべて落とされている。畦道伝いに迂回路を採しながら進む。

大隊の行動長径は4キロくらいに延び、道が粘土質のためツルツル滑って、うっかりすると深田に滑り落ちる。行軍速度は1時間、せいぜい1・5キロ〜2キロ程度。朝から歩いて金山に着いたのは午後4時ごろであった。

## 上海から南京へー11月7日の中支那方面軍設立と作戦目的の拡大

さて、日本軍の増強と第10軍の杭州湾上陸とによって、上海での彼我の戦勢は決定した。次には、逃走する中華民国軍を追送してその首都南京を陥れるか否かが、争点であった。

11月7日、「中支那方面軍設立と作戦目的の拡大」が決定される。支那事変の戦争目的は、ここに大きく拡張されることとなる。偕行社『南京戦史』に倣う。

## 偕行社『南京戦史』ー作戦目的の拡大

そして、杭州湾上陸成功後、11月7日、上海派遣軍と柳川軍（柳川平

助中将指揮する第10軍）とを編合指揮するため、中支那方面軍司令官が設けられて松井方面軍司令官にその任務が中央から示されたが、当初の作戦目的であった「居留民保護」から「敵ノ戦争意志ヲ挫折セシメ戦局終結ノ動機ヲ獲得スル目的ヲ以テ上海附近ノ敵ヲ掃滅スルニ在リ」という積極的なものに変わり、11月12日「方面軍ノ作戦地域ハ概ネ蘇州、嘉興ヲ連ヌル線以東トス」との上海西方に進出制令線が指示された。これは注目すべき変化であった。

また、「重藤支隊、第16師団は、遅れて11月13日、白茆口に上陸し、福山、常熟方面に進出したのであるが、第10軍に背後を衝かれた上海戦線の中国軍が総崩れとなり、退却を開始したのは、これより先11月9日のことであった」。

## 上海から南京へー追撃の発起

「かくて（松井）方面軍司令官は『常熟、蘇州、嘉興ノ線ヲ占領シ爾後ノ作戦ヲ準備セントス』との命令を下し、上海派遣軍隷下の各兵団は戦塵を洗う暇もなく12日、一斉に追撃を発起、第9師団は19日蘇州を占領、同じく19日、第16師団および重藤支隊は常熟を占領、また第10軍主力は急進して同日嘉興を

占領した」。然し上の文言でも明らかな通り、この時点でもまだ、方面軍の正式な命令は、「南京攻略」を公認するものではなかったのである。

## 上海から南京へー「制令線」の突破から「攻略命令」決済まで

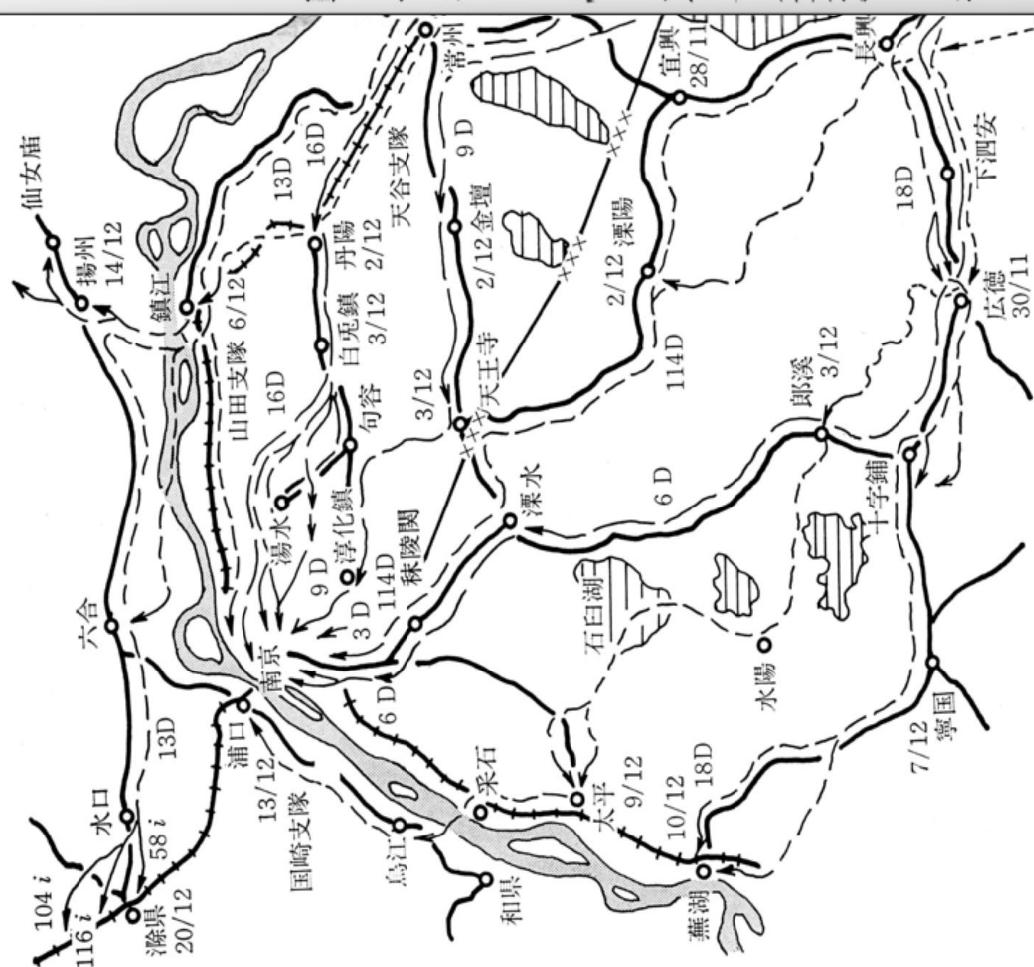
すべて偕行社刊『南京戦史』に依拠する。

松井方面軍司令官は、11月15日「東京ヨリ来レル影佐禎昭大佐〔参本・第8課（宣伝謀略担当）長〕、柴山兼四郎大佐〔軍務局軍務課長〕ニ南京攻略ノ必要ヲ説いた。

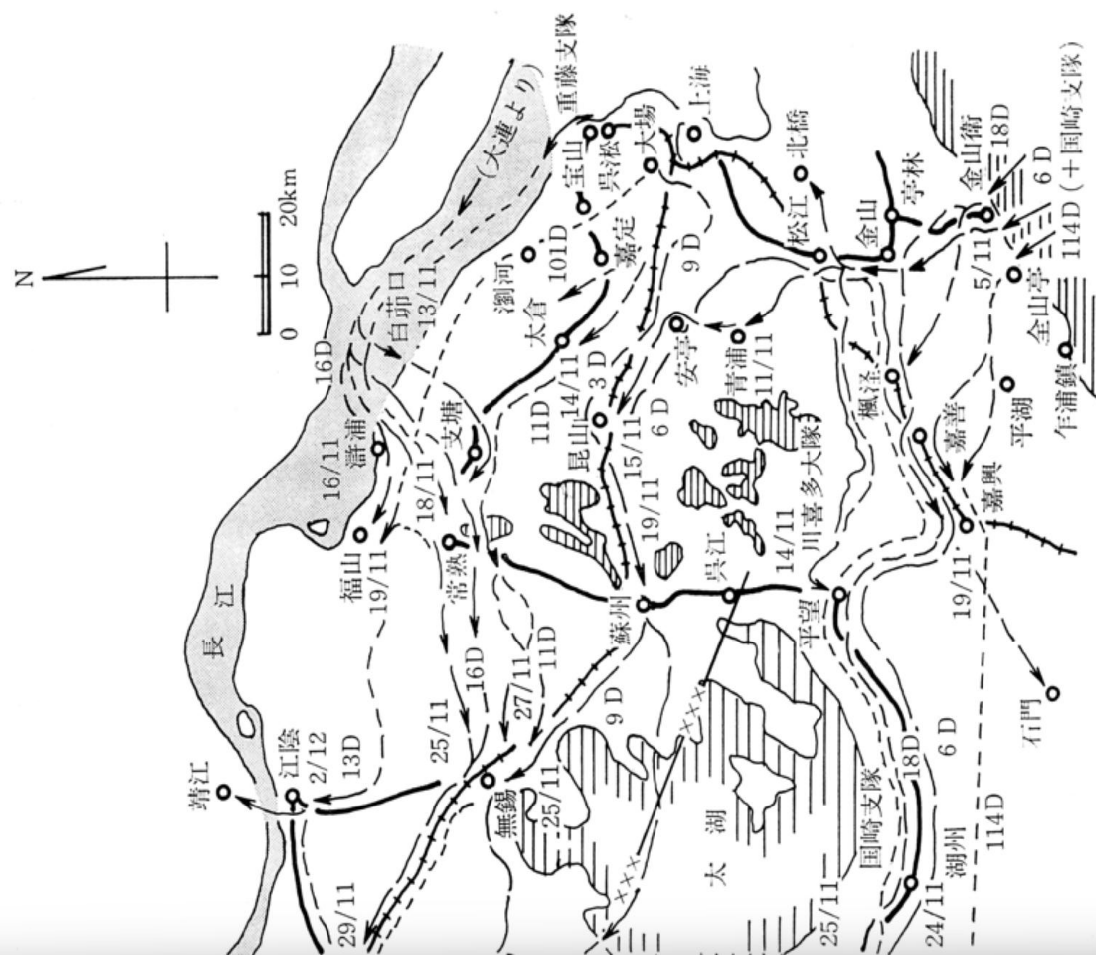
他方、「中国軍の総崩れに尾して追撃に移った方面軍は、すでに述べたように早くも11月19日には中央から示された蘇州ー嘉興の制令線を突破する勢いとなった。

とくに杭州湾上陸に成功した第10軍はこれよりさき15日、柳川軍司令官臨時席のもとに幕僚会議を開き、「独断南京追撃敢行」を決し、19日朝「南京ニ向ツテスル追撃ヲ命令」した旨、参謀本部に発電報告するに至った。これは、「太湖東方における包圍作戦不徹底のため敵主力殲滅の機会を逸したが、敵は潰乱状態にあり、この躍動する戦機をとらえ一挙に追撃を敢行すれば、約





(偕行社『南京戦史』 P. 70~71)



20日間で南京は占領可能」との判断に  
よるものであった。

この報告に接した多田（駿）参謀次  
長は大いに驚き、急ぎ追撃禁止の措置  
をとったが、22日になると、中支那方  
面軍からも第10軍の行動を是認するが  
如き要旨次のような意見具申が到着し  
た。

「今や敵ノ抵抗ハ極メテ微弱ニシテ  
飽ク迄南京ヲ確保セントスル意図ヲ認  
メ難シ、此際蘇州、嘉興ノ線ニ軍ヲ留  
ムル時ハ戦機ヲ逸ス」

「事変解決ノ為ニハ首都南京ノ攻略  
ハ第一義的価値アリ」

「第10軍ハ後方ノ成立次第躍進ヲ続  
ケ得ベク上海派遣軍ハ旬日ノ休養ヲ与  
フルコトニヨリ南京ニ向フ追撃ハ可能  
ナリト判断シアリ」

偕行社『南京戦史』は言う。「これ  
を受けて、参謀本部第一部では河辺虎  
四郎作戦課長を中心に審議の結果、制  
令線廃止の結論を得た。当時ドイツの  
中華大使トラウトマンによる和平交渉  
に期待し、事変の拡大を深く憂えてい  
た多田参謀次長はなお前進不可の方針  
を堅持していたが、24日になってつい  
に同意を与え『中支那方面軍作戦地域  
ハ之ヲ廃ス』ノ指示が出されることと

なった。

戦線不拡大の中央の方針に基づき方  
面軍が制令線に停止している間を縫っ  
て、上海周辺にあつた中国軍の主力は  
すでに安徽省に、一部は浙江、江北に  
退却しつつあつた。

戦術的に見ると、敵主力撃滅の好機  
は去りつつあつたのである」と。

然し、然し、11月24日になつてもな  
おー24日の午前会議においても、下記  
の如く、軍中央の意思決定内容は、明  
確ではなかった。「中支那方面軍の主  
眼は、上海附近の敵の掃蕩、上海を南  
京から孤立させること」であり、また  
「補給の体勢のみならず戦闘体制すら  
も十分に準備出来ていない」が故に、  
「直ちに南京に到達することは困難」  
であり、ただ「進撃の氣勢を示して敵  
の戦意を砕く」、ことだ、と。

### 11月24日御前会議

「中支那方面軍ハ上海附近ニ於ケ  
ル戦勝ノ成果ヲ利用致シマシテ機ヲ  
失セス果敢ナル進撃ヲ実施シツツア  
リマスカ来此軍は上海附近ノ敵ヲ  
掃滅スルヲ任務トシ且同地ヲ南京方  
面ヨリ孤立セシムルコトヲ主眼トシ  
テ編組セラレテ居リマス閣僚上、其  
推進ニハ相当ノ制限ガ御座イマスノ

ミナラス、目下其前線部隊ハ其輜重  
ハ固ヨリ砲兵ノ如キ戦列部隊スラモ  
尚遠ク後方ニ在ル者歟ク御座イマセ  
ン 隋テ一挙直チニ南京ニ到達シ得  
ベシトハ考ヘテオリマセヌ 此ノ場  
合方面軍ハ其ノ航空部隊ヲ以テ海軍  
航空兵力カト協力シテ南京其ノ他ノ要  
地ヲ爆撃シ 且絶エス進撃ノ氣勢ヲ  
示シテ敵ノ戦意ヲ消磨セシムルコト  
ト存シマス。」

以上の如く、この御前会議の本旨に  
は、軍の進撃を抑制する意思が表明さ  
れている。しかし、下村定回想録によ  
れば、説明にあたつた下村第一部長は、  
「御前で」此の際どうしても申上げ  
ておかねばならないと云ふ考へから、  
準備した原案になかつた独断を天皇に  
奏上した。即ち、「統帥部と致しまし  
ては今後の状況如何により該方面軍を  
して新たな準備体制を整へ南京其の  
他を攻撃せしむることをも考慮して居  
ります」と、「南京攻略」を示唆する  
文言を独断追加したのである。「後で  
「多田」次長から叱られ」たのであつ  
た。

参本作戦課・井本熊男大尉回想も又、  
「石原少将と交代した下村第一部長の  
考え方は積極的であつて、就任当初か  
ら敵に大打撃を与え、南京攻略までや

らなければ事変解決の端緒はつかむこ  
とができないと考えていたようである」  
と、下村が積極策を持っていたことを、  
裏書きしている。



下村 定 (Wikipedia)

更に河辺虎四郎作戦課長回想は、以  
下のように、南京攻略の可否に関する  
軍部見解の分裂を伝えている。

### 河辺虎四郎作戦課長回想

私が上海に参りまして武藤章（方  
面軍）副長と話をした時（11月17日）、  
副長は「南京をやったら敵は参る」  
と申し、私は「南京はやらなければ  
ならんが、やっても蔣はまだ参らん  
よ」などと水掛論をやったことを思  
ひ出します。

すなわち、「松井方面軍司令官は25  
日、隸下両軍に対し無錫―湖州の線に  
おいて爾後の作戦を準備せよと命じた  
が、第10軍は、さきに中央から南京追

撃中止の命を受けたのちも『南京に向ふ作戦を準備』するなど曖昧な軍命令を下すことによつて表面を糊塗しつつ、次々と既成事実を積み重ねていたのである。

戦史叢書は、「南京攻略の決意も司令線の突破も、常に第10軍が独断の名のもとに先駆けをなし、(中支那)方面軍がこれに追隨し、中央が追認する形をとつて進行したことは注意を要する」と断じ、総括する。

さてその通り、「方面軍が追隨し、中央が追認する」。

「現地軍が余勢を駆つて所命の無錫―湖州の線以西に進出しつつあるのを知つた参謀本部下村第一部長は、11月27日、塚田方面軍参謀長あて『当部ニ於テハ南京攻略ヲ実行スル固キ決意ノ下ニ着々審議中ナリ 未タ決済ヲ得ル迄ニハ至ラサルモ取敢エス才含ミマテ』と親展電報を打ち、これに対し方面軍参謀長は「『唯今貴電ヲ見テ安心ス勇躍貴意ニ副フ如クス』と、返電している」のであつた。「まさに矢は弦を放たれんとしていたのである」。下村作戦部長の回想によれば、「有末」次中佐が作戦指導要綱を起草して来ましたので「多田」次長には之に就いて色々突込んで申上げまして到々28日だと思

ひますが同意されましたので、それからは一瀉千里に事がはこんだ・・・」のであつた。

かくて、「南京攻略命令」は11月28日、ついに決済されたのであつた。

### 上海から南京へ―困難極めた補給の実状

さて、「南京攻略命令」は11月28日、ようやく確定されたが、我が軍の上海から南京への進軍は、然し、容易なものではなかつた。特に軍指導部の短慮により、輜重・補給は難渋を極めた。偕行社『南京戦史』に引用された『松井岩根日記』は、「上陸直後の第10軍の後方」について、記す。

### 『松井岩根日記』―上陸直後の第10軍の後方

第一線の兵は軽装備で急ぎ進撃を開始したが、その後方諸部隊は不完全な補給路のため行動は困難を極めた。

・・・上海戦線にあつた(上海)

派遣軍将兵は、約三カ月にわたる悪戦の陰惨な空気が解放され、新たに戦線に加へた第10軍、(上海派遣軍)第16師団とともに、まず南京城外の磨盤山山系に向かつてたのであ

るが、太湖周辺の江南平野には至るところにクリークがあり、このクリークにかかる橋は(支那軍によつて)殆ど破壊され、また路外は深い水田地帯である。そのため、民船を操りクリークを利用して進んだ一部を除き、数少ない道路に歩、砲兵、輜重、自動車隊の人馬車両が増集して(一カ所に群がり集まり)先を争うのであるから、その渋滞は甚だしかった。

続けて、「方面軍兵站主任参謀・二宮義清少佐談」は、11月17日、柳川平助中将指揮下第10軍の、後方支援の実状について記す。

### 方面軍兵站主任参謀・二宮義清少佐談

第10軍は金山衛城付近の遠浅海岸に500メートルの棧橋を構築したが役に立たなかつた。同軍は166隻の輸送船中97隻を上海に回航し、そのため黄埔港には、合計124隻の輸送船が集まつた。上海には、(上海)派遣軍の軍需品を積載した輸送船27隻が停泊していたが、右97隻の到着で、その揚陸は著しく妨害せられている。

どの船に何が積んであるのかさ

ぱりわからず、これを確かめるのに苦労する。船長も知らず、一とおり調べるのに3日を要した。

(中支那)方面軍の糧食は約2日分保有量がある。毎日揚陸しているのは1日程度で、この状況は容易に改善せられない。

民船による軍需品輸送に関わる困難は、それだけにとどまらなかつた。軍馬の船舶輸送には大きな弱点があつた。即ち、「軍馬は長期、船倉にとじこめられる船舶輸送には弱」かつたのである。二宮方面軍兵站主任参謀は、「馬は痩せ衰えて役に立たない。自動車は不足を強く感じている」と、語る。

然しながらともかく、「古来、中国の交通は南船北馬と称せられるが、追撃発起後は陸上と異なり、民船を集めた舟運の効率は高かつた」のであつた。

『第9師団経理部衣料科附部員以下行動一覽表』所見は、「軍当局は、水に明け水に暮れ行く江南の地(長江下流域南方の江蘇省南部と浙江省北部)における輸送手段として水路の利用の優位性に気付くのが遅かつた」と、嘆いている。

### 『第9師団経理部衣料科附部員以下行動一覽表』所見

「上海派遣」軍ハ漸々今日ニ至リ  
テ補助兵站戦トシテ水路ヲ利用シテ  
揚行鎮迄ノ糧食輸送ヲ開始セリ。

思フニ水ニ明ケ水ニ暮レ行ク江南  
ノ地、地図通ノ水ト舟ノ地ニ来リ何  
ソ水路利用ノ遅キヲ慨カサルヲ得ス。  
陸軍力當テノ上海事変其他ニ於テ何  
ヲ学ヒタルカ。真剣味ト烈々トシテ  
燃ユルカ如キ熱意ナカリシコトヲ遺  
憾トスル所ナリ。

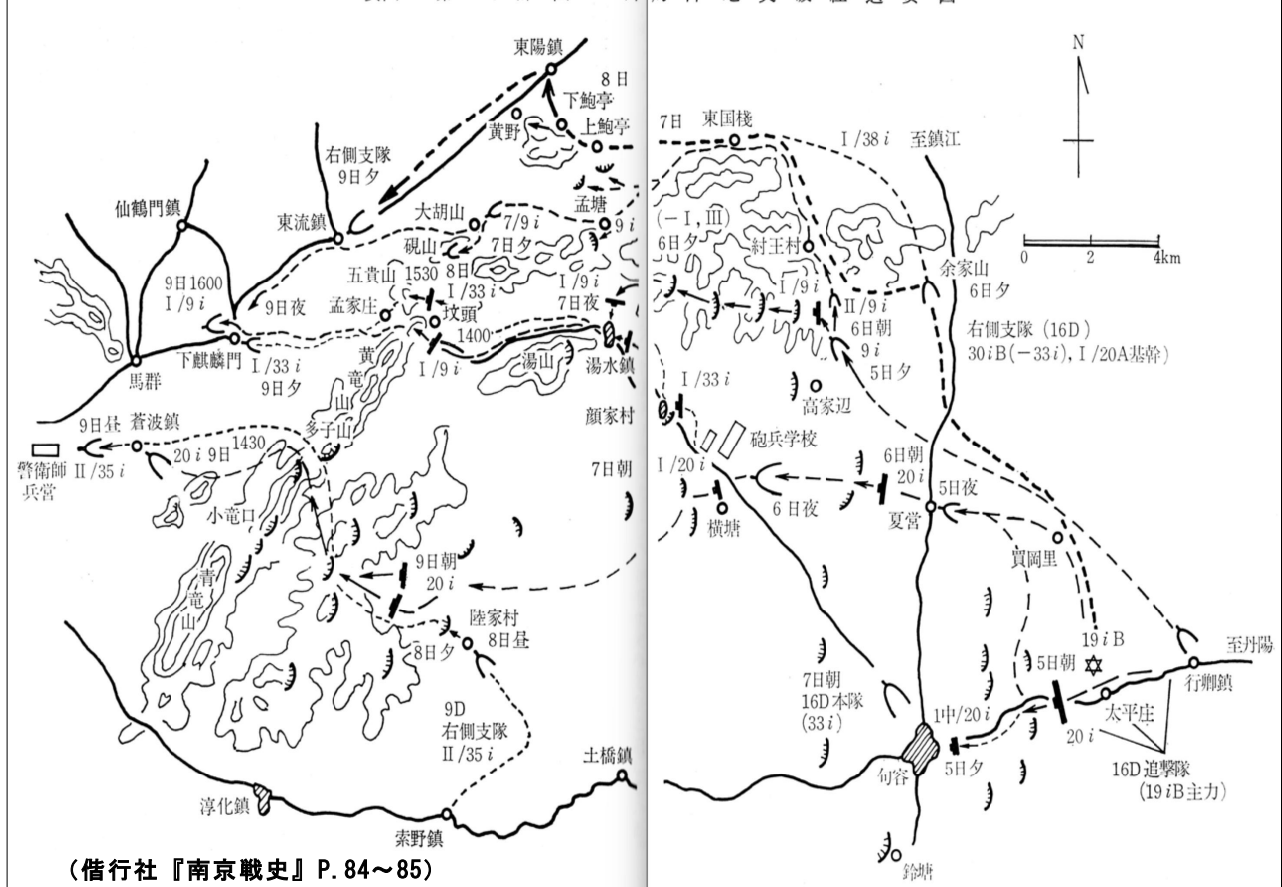
吾人ハ軍当局力此ノ当時加給品ノ  
追送ヨリモ船ノ追送ヲ為シタランニ  
ハ、如何ハカリ兵ノ給養（人々馬に物  
を与えて養うこと）ヲ良好ナラシメシナ  
ラント痛感スル次第ナリ。

中支那方面軍司令官松井石根大將も、  
方面軍の補給の実状について、11月18  
日の日記に記す。

「軍ノ追撃二伴ヒ補給ハ蘇州河（中  
国、江蘇省南東部の太湖から上海市西部を流れる  
呉淞江の別称。とくに上海市に入ってから蘇州河  
とよばれる）、瀏河（太湖から長江に注ぐ水  
路）及白茆河又ハ漕浦河ヲ利用シ、主  
トシテ水運ニヨリ一部ノ陸上輸送ト相  
俟テ概テ其目的ヲ達成スヘキ見込ナル  
ヲ知ル。」

いずれにせよ、第9師団参謀部の報  
告する通り「上海附近より南京に至る

要図8 第16師団の外周陣地突破経過要図



約百里の間殆ど糧秣の補給を受くるこ  
となく現地物資のみに依り追撃を敢行  
したのであった。（第9師団麾下伊佐一男  
大佐指揮）歩兵第7連隊史は記す。「給  
養は殆ど徴発に依つて賄ったが、副食  
物の多大なる不足を感じなかった。こ  
れは物資豊富な地方の作戦であつたか  
らである。しかし多数の駄馬（荷物を背  
に乗せ運ばせる馬）を失い、歩兵砲、機  
銃中隊、通信班、大小行李（竹や柳、籐  
などを編んでつくられた筐籠。多くは直方体の容  
器で、衣料や文書あるいは雑物を入れるために用  
いる）等は非常に苦労した。臂力（腕の  
力）搬送だけでは追及することがで  
きなかった。支那人夫牛馬を徴  
発し或は民船を利用する等、凡有手段  
を講じたのであった」と。進軍には、  
「凡有手段を講じ」なければならな  
かったのである。

(続く)



## 硫黄島戦没者遺骨収集団に参加して

令和7年度硫黄島戦没者遺骨収集  
第1次派遣団員 柳澤 孝興

筆者らは、令和7年7月2日から約2週間、硫黄島における遺骨収集活動に、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会から派遣され、英霊のご苦勞を垣間見る機会を得ました。

硫黄島は、米軍にとって、日本本土爆撃の際、爆撃機運航の確実性、護衛戦闘機の離発着上不可欠な拠点であり、日本軍にとっても本土防衛面で、最も緊要な要点でした。



硫黄島の全景（画像提供：小笠原村）

このため、昭和20年、日本陸海軍の将兵約2万人は、米軍の圧倒的な航空火力そして艦砲射撃に支援された3個師団6万人以上の上陸に対して、硫黄島の地下壕を主たる拠点として、縦深にわたる防御戦闘を展開し、勝者の損害が敗者のそれをはるかに超える史上稀有と評される戦いを継続しました。

このように極めて過酷な条件のもとで、日本軍による孤軍奮闘の善戦が繰り広げられましたが、無念のうちに、硫黄島の戦いが終わり、敗戦を迎え、終戦後幾度か遺骨収集活動が行われましたが、今なお、望郷の念を抱く約1万人を超える英霊の遺骨が回収されずに、そのまま孤島に、虚しく眠っているのも否めない事実でしょう。

令和7年度の最初の遺骨収集活動に参加し、多くの英霊が硫黄島における過酷な環境の中、祖国の栄光を念じつつ、散華されたことを思うと、言葉がありません。

今回の遺骨収集活動を通じ、多くの英霊が、特に苦しんだであろうと推測される点について気が付きましたので、その思いと経験について述べさせて頂きます。

硫黄島は、旧くから硫黄の島と呼ばれていた歴史を紐解くまでもなく、現



火山活動の様子



火山性の熱気が充満した壕内

ます。

硫黄島は、今でも、噴火活動が活発で、水蒸気の噴煙の噴出や地表面の隆起が、報道されています。

火山の噴火活動が続く中、高温の硫黄ガスや灼熱の地熱に加え、日本軍将兵の悩みの極みは、乏しい水でした。焼き付くような喉の渇きに苦しんだ旨は、当時の資料に生々しく残されています。現在の硫黄島でも、生きる術の命の水は、雨水に頼るのみの環境です。つまり、地下及び地表面に湧き出る水は皆無であり、天からの雨水を集める他はありません。硫黄島の地名に、金明水そして銀明水と呼ばれる名称が残っている理由が、容易に理解できます。



雨水の貯水に使われたと思われる施設



す。

戦闘準備間及び戦闘間も、焼けつくような灼熱の中、乏しい水に苦しみながら、靱強な戦闘を可能とする地下壕陣地を構築し、戦闘を継続しなければならぬ将兵の困難性は、察するに余りがあります。

つまり、陸海軍の英霊にとっては、敵との闘いの前に、厳しい環境の中で、生き続けること、そして掩体構築に従事すること自体が、大きな試練だったことでしょう。

しかも、サイパンの失陥を境とし、従来の水際撃滅方針から、新たに縦深漸減方針に転換し、工事所要が増大したことも厳しさを増した要因の一つでした。

このような艱難辛苦のもと、厳しい

地質環境の中、米軍の圧倒的な爆撃、艦砲射撃に耐え、米軍が5日間で硫黄島占領を完了すると見積もっていた激戦は、陸海軍将兵の奮闘により、46日間に及んだのでした。

硫黄島の複郭陣地跡において、硫黄ガスのためか米軍の砲火によるものか判りませんが、黒く変色に至ったご遺骨を探し当てた際は、英霊の無念さが伝わってくる思いがしたのは私のみではないと確信しています。

散華された英霊の思い、そして故郷において、父や子息等肉親の無事の帰還を待っていたご家族の思いを考えますと、英霊のご遺骨を一刻も早く、灼熱の地から母国へお連れすべきと思わずにはいられません。



遺骨収集現場の様子



収容した御遺骨を捧持し搭乗



令和7年度硫黄島遺骨収集第1次派遣団



## 事務局からの報告等

## 一 令和7年度臨時理事会の開催

10月30日(木)、当協議会事務所において令和7年度臨時理事会を開催しました。

本会議では事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結果、それぞれ原案の通り承認されました。

## 議案

- ①第1号議案…令和7年度上半期職務執行状況
  - ②第2号議案…令和7年度上半期予算執行状況
  - ③第3号議案…令和7年度上半期財産運用
  - ④第4号議案…常勤役員の報酬月額改定について
- 理事6名及び監事2名が出席

## 二 令和7年の慰霊祭参加状況

- ①3月8日、JYMA日本青年遺骨収集団慰霊祭に専務理事が参加
- ②3月29日特攻隊戦没者慰霊顕彰会慰霊祭に専務理事が参加
- ③4月6日、陸修偕行社群馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭に事務局長が参加
- ④4月17日、令和7年度陸修偕行社慰霊祭に事務局長が参加

⑤4月22日、靖國神社春季例大祭に安倍会長が参加

⑥4月28日、靖國神社永代神樂祭に事務局長他1名が参加

⑦5月25日、予科練戦没者慰霊祭に事務局長が参加

⑧5月26日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑春季慰霊祭に専務理事が参加

⑨8月15日、全国戦没者追悼式に専務理事が参加

⑩8月15日、全国戦没者慰霊大祭に専務理事が参加

⑪9月23日、特攻平和観音年次法要に事務局長が参加

⑫10月17日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭に専務理事が参加

⑬10月18日、靖國神社秋季例大祭に事務局長が参加

⑭10月26日、ソロモン群島方面戦没者慰霊祭に専務理事が参加

⑮11月1日、駆逐艦菊月会戦戦没者慰霊法要に事務局長が参加

## 三 硫黄島戦没者遺骨収集派遣参加

令和7年度第1回派遣に陸修偕行社から2名が参加され、23柱を収容されました。

第2回派遣(2名)、第3回派遣(2名)は硫黄島の火山活動の活発化による島内施設の被災状況及び派遣団

の安全を考慮し中止になりました。

このような状況ではありますが、第

4回派遣(2月3日～2月19日)に、つばさ会及び当協議会賛助会員から各1名の参加を予定しています。

## 四 新入会員紹介(敬称略)

(令和7年8月26日～12月15日)

## 【賛助会員】

末廣 信也 高市奈都子 林田 好広

賛助会員3名

## 五 広報誌「慰霊」掲載文のお詫びと訂正

「慰霊65号」に誤りがありました。

P9一段 左側コラム枠

「第10軍戦闘序列」の2行目

第6師団所在地の記載が誤っていました。

(正) 熊本

(誤) 京都

謹んでお詫びし訂正いたします。

## 六 靖國神社永代神樂祭のご案内

永代神樂祭は会員の高齢化等で慰霊祭の斎行が困難になる中、「大東亜戦争全戦没者」を慰霊顕彰するため、靖國神社によって毎年4月28日、永代にわたり祭祀をしていただけるものです。令和8年4月28日の神樂祭に参列を

希望される方は事務局までご一報下さい。

なお、奉奏日の4月28日はサンフランシスコ講和条約が発効し、我が国の主権が回復した日であり、大東亜戦争の国難に敢然と立ち向かわれたご英霊の勇氣と献身を思い起こし感謝するよい機会になると思っています。



## 七 寄付のお願い

会員各位をはじめ戦没者慰霊活動にご協力いただいております皆様には、日頃から当協議会の活動に深い理解とご支援を賜り篤く御礼申し上げます。

当協議会は、設立当時2,000人を超える賛助会員等により発足しましたが、戦後80年、当協議会発足から20年を迎え、会員各位が鬼籍に入られたとの知らせが増え、新規に入会される方もおられますが、昨年度末（令和7年3月末）賛助会員数は470名余となりました。

これまで皆様からいただいた会費及び寄付等の浄財並びに資産運用の収益によって会の運営を行ってきたところですが、近年は事業に係わる支出が収入を上回る状況が続いています。

有り体に申せば最近の物価高に伴い慰霊祭の斎行、広報誌の発行・配布、ホームページの運営及び事務所運営にかかる経費等の固定的な費用が上昇し、**年間の赤字額として200万300万円程度を計上せざるを得なくなっています。**

このため発足当時の財産を取崩しながら運営する事態に陥っています。このまま推移すると**10年を経ずに法人法に定める事由により解散せざるを得ない状況に立つてしまうことを危惧しています。**

本会発足の主目的である戦没者崇敬に関する思想の普及や戦没者慰霊事業の継続のため倍旧のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

また、**お知り合いの方などに当協議会への入会や寄付を勧めていただきますよう重ねてお願い申し上げます。**

なお、当協議会にお寄せいただく年会費及び寄付金は、下記の通り**税額控除の対象**となりますので申し添えさせていただきます。

### ※補記

当協議会のホームページには、会の概要（情報公開資料を含む）、参加団体、活動の概要、これまでに発行した広報誌、問い合わせコーナー等を掲載しています。参考にいただければ幸いです。

ホームページ <https://ireikyoku.com>

## 会費納入のお願い

当協議会の活動は、会員の皆様の会費・寄付金等の浄財で成り立っております。

令和7年度年会費未納の方には払込取扱票を「慰霊第66号」に同封していますので、年度会費納入の際ご利用いただき、会費納入にご協力をいただければ幸いです。

## 寄付金の税額控除に係る領収書等の送付について

当協議会は、租税特別措置法に基づく税額控除対象法人に認定されております。

従来、5000円以上の年会費・寄附金を頂いている方に領収書及び証明書（写し）を送付しておりますが、本年度も同様の処置をさせていただきます。

なお、本送付は、12月以降随時発送中ですが、該当される方で未だお手元に届いていない方がおられましたら、お申出いただけますようお願い申し上げます。

また、5000円未満の方でも、確定申告にあたりこの領収書及び証明書（写し）をご希望の方は、遠慮なく電話・メール等で事務局までお申し出下さい。

電話 〇三ー六三八〇ー八九四三  
メール [bc605197@nifty.com](mailto:bc605197@nifty.com)

## 新規会員獲得への協力をお願い

当協議会は、有志会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永続と充実を希う、多くの皆様の当協議会への入会を心からお待ち申し上げております。

既会員の皆様には、お知り合いの方の入会勧誘について、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会員の区分と年会費は 次のとおりです。

### 一 賛助会員

（本会の趣旨に賛同する個人）  
年会費 三〇〇〇円

### 二 賛助特別会員

（特別御芳志の賛助会員）  
年会費 五〇〇〇円

### 三 正会員

（本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体）  
年会費 一〇〇〇〇円

### 四 特別会員

（本会の趣旨に賛同する企業・法人団体）  
年会費 一口 一〇〇〇〇円（一口以上）

\*振込先口座番号（郵便振替口座）  
〇〇一四〇一六・二三四九三〇

（当協議会へ事前に連絡をいただければ、振込料無料の振込用紙付「入会のしおり」をお届けいたします。）